

島津亜美(しまづあみ)
年齢 / 20歳
身長 / 161cm
体重 / 43kg
BWH / 79・50・82



大学生。
ごく普通の、今時の
女子大生。

趣味は特に無し。

日課は、朝のジョギング。
理由は、健康と美容のため。

男には興味は無かったが、
大学に入って、普通に彼氏が
出来る。

将来の進路は、普通のOL。

「はっ…はっ…」

亜美の、日課である、早朝ランニング。
昨日は飲み過ぎたので、カロリー消費を
目論んでのものである。

まだ若い亜美は、早朝にランニングをしても、
普通に学校に行く元気があった。

適当に2kmほど走ると、
一人暮らしをしている
アパートへと帰る。

シャワーを浴び、汗を流すつもりだった。
女である亜美は、出掛ける前にシャワーを浴びるのが
常識だった。
身だしなみにも気を遣う、普通の女の子である。

シャワーを浴び、バスルームから出る。タオルで髪を拭きながら、鏡の前に立っていると。

「お早う、亜美」

昨夜、部屋に泊まった、社会人の彼氏が起きて来た。

「まだ寝てていいのに」

裸体を見られても、憶する事無く、亜美。冷静に返す。裸など、とつくに何度も見られているのだ。昨夜も、身体の隅々まで徹底的に。

男は、気にせず肌を晒し続ける、亜美の身体に見惚れる。ランニングが日課の亜美の身体は、細く引き締まっている。女として、理想的なスレンダー体型だった。



「綺麗だよ、亜美」

昨夜、飽きるほど抱いた、愛しい恋人の身体。
しかし、一晩眠った事で、性欲が復活していた。
男は、亜美の裸体に見惚れる。

「恥ずかしいわ…
ジロジロ見ないで」

亜美は、あまりグラマー
では無い自分の胸に、
多少引け目を感じていた。
もっと胸が大きければ、
恋人を喜ばせてあげられる
のに、と。

「そんなに綺麗なんだから、恥ずかしがる事は無いよ」

「……そう。有難う」

平静を装い、答える亜美。本当は、結構嬉しい。まだ若いせいか、素直に感情を表に出す事に、抵抗があったのだった。

「あなたも、早く準備しないと、遅れるわよ」

いつもしている、ポニーテールの髪型に纏める亜美。子供の頃からの、トレードマークだった。

「ムラムラして来た」

「だめ」

明確に拒否する亜美。昨夜も、明日に備えて速めに休まなければならないというのに、3回も射精されてしまった。気持ちは良かったが。

「あんまりエロい人、嫌い」

生真面目な亜美は、セックスは嫌いでは無いが、あんまり無節操なのも勘弁願いたかった。

結局、二人はそそくさと準備し、亜美は大学へ、男は会社へと向かうのだった。

帰るなり、入浴をする亜美。今朝はシャワーだけだったので、ゆっくりと入る。

以前は、入浴など一日一回だけだった。
(洗髪などは、出掛ける前は必ずしていたが)

彼氏が出来てからは、頻繁にお風呂に入る。まるで、しずかちゃんのように、と自分でも思った。

『綺麗好きって言うよりはね…』

理由は、恋人の存在である。まだラブラブな二人。男は、暇さえあれば、身体を求めて来る。求められるのは、女としては嬉しい。しかし、準備が大変なのも事実。まあ、女に生まれた以上、仕方が無いと、割り切る。

「……………」

正直、恋人の事は好きだし、セックスも好きである。折角なので、楽しめる方法を考える。男が訪ねて来るまで、まだ何時間かあるからだ。今日は、もっと甘えてみようか。などと考える亜美だった。

「ああ……ん、ああ……っ」

予想どおり、帰って来るなり、セックスを始める二人。強く求め合い、愛撫。情熱的なキスに、亜美も応える。服を脱がし合いながら、すぐに繋がる。甘い声を出す亜美。声は、いつも控えめだが、今回は結構、聞こえるような声だった。感じている。繋がりが合いながら、服を脱いでいく。ベッドに着く頃には、全裸になっていた。

「だ……めえ……、そんな……あ……っ」

ぬふ、ぬふ、と繋がっている場所が見える。
『俺達が繋がってるのが見えるよ、亜美』と男が言うと、亜美は甘い声を出した。

『だめ……こんな……いやらしい……』

自分でも、いつもより乱れているのが分かる。待っている間、男の事を考えていたら、ムラムラしてしまい、オナニーをしてしまったのだ。そのせいで、淫乱になっている。

『自慰なんて……絶対しないって思ってたのに……！』

我慢出来なかった。恋愛感情と性欲は、正比例するのだから、恋をしている者なら誰でも知っている常識だった。

「ほら……入ってるよ？何が入ってるのか、言ってみな亜美」

「あ……ああん……、ち……ちんぽ……」

男に誘導され、行為の中で教え込まれた、淫らな言葉。認めたくは無いが、言うと興奮し、よりセックスの気持ち良さが増した。これが、大人の恋の世界なのか、と亜美は思う。この日は、いつも以上に盛り上がり、亜美はかつて無いほどに乱れた。いやらしい事も沢山言った気がする。後で恥ずかしくて、後悔すると分かっているけど、止められなかった。亜美は、普通の恋する女子大生なのだから。

「ちょ……嫌よ、そんなの……！」

フェラチオを頼まれ、拒絶する亜美。
知識はある。今どきの女の子なのだから。
故に、抵抗があった。嫌悪感では無く、
羞恥心からだった。

『こんなに大きいの……！？近くで見るの
初めてだから…』

ドキドキする自分が居た。何せ、
オナニーの時は、フェラする
自分を想像して、興奮していたからだ。

「じゃあ、
最初は俺が
してやるよ」

「や……ちょっと、止め……そんな……恥ずかしい、あっ……あああん！」

クニで攻められ、何度もイカされる亜美。そのうち、いやらしい気持ちになって来た亜美は、
男への燃え上がるような愛しさに屈服し、いつしか、夢中でフェラチオをするようになった。

いつものように、日課であるランニング中に、それは起こった。

「……………っ!？」

ビリッ!と身体が痺れたような感覚。急激に意識が遠のく。

道端に倒れ込む亜美を、屈強な大男が担ぎ、車に乗せる。白昼堂々と、それは行われた。

その日から、亜美は姿を消す。恋人である男が、家を訪ねても、亜美の姿は無かった。そして、いつまで待っても、帰宅する事は無かった。

搜索願いが出されるが、亜美は見つかる事は無かった。

数日後、亜美は死体で発見された。死亡したのは、つい最近であり、生きていた間、何をされていたのか、それを特定する事は容易だった。亜美の身体からは、大量の体液が検出されたからだ。それは主に、唾液と、精液だった。特に膣内からは、凄まじい量の精液が検出された。(レイプされていた事は、明白だった。)

「も……止め……許して……」

ぬぶっ！ぬぶっ！ぬぶっ！ぬぶっ！

屈強な男からの、レイプ。気丈な
亜美も、既に絶望し、抵抗する
意思は失われていた。

「そんな……もう……ああ……」

反応が弱くなると、
薬を打たれ、
快楽の世界へと
導かれる。もう
完全に、シャ○中
セックスに依存
していた。

レイプは、三日三晩、休まずに行われた。
男もシャ○中であり、覚醒状態が継続
していた。

最後の方は、亜美自身も淫乱化し、
自ら腰を振り、セックス、チンポと連呼し、
淫らな顔をカメラに向けるようになった。

「はあ……、ああ……凄い……おちんぼ凄い——っ」

恋人でも無い、誘拐犯による強姦。それに快楽を感じる亜美。既に、投薬によって、洗脳されてしまっていた。かつての、ストイックで、潔癖な雰囲気は、微塵も感じられない。

「まったく、淫乱な女だな。そんなにイイか？チンポ。ほら、カメラに向かって言ってみな」

「あああん、ちんぽ、ちんぽいいっ！私、チンポセックス大好きですう…！」

ずっと回り続けている、ビデオカメラ。亜美への強姦、薬漬けされ、現在に至るまでの様子が、全て撮影されていた。

「これから、今のお前の姿、全世界に配信するからな。楽しみたる？」

「そんな……私のチンポセックスでマンコズコズコされるエロい所、世界中の人が……ああんそんなあ……興奮するう……！」

そう言って、淫らに腰を振りまくる亜美。もう、シャ○中で頭がイカれていた。欲望を貪るだけの、セックスマシーンと化している。

「そろそろ飽きて来たぜ。次のプレイに移ろうか」

「はいい……何でもしてくださいい……」

亜美は、男のどんな非道なプレイにも、快楽を感じるようになっていた。次に何をされるのか。考えただけで、イキそうだった。

「うえげっ！……っ！」

首と手を、ロープで縛り上げられる。
SMプレイか？と興奮していた亜美だが。

「ほら、どうだ？首吊りプレイだぜ」

天井から伸びたロープが、亜美の首を締め上げる。機械によって、徐々に巻き上げられていくロープ。亜美の首を締め付け、全身を首で持ち上げていく。爪先で立つ亜美。既に、息も出来ない状況だった。

「ああ……可愛い亜美」

「……っ！やめ……！
ぐるじ……じぬう……！」

男は、苦悶に表情を歪める
亜美の顔を見て、興奮し、
勃起していた。

「そりゃ、これからお前の事
殺すんだから。当然だろ？」

男は、誘拐犯であり、強姦魔。そして、
殺人鬼だった。女を犯し、殺すのが趣味。
特に、殺人は最も興奮するプレイだった。

「——っ！！——っ……！！」

遂に、爪先が地面から離れる。ぱたぱたと
足を動かし、床を求める。全体重が、首に
掛かり、ロープを締める。いくら体重の軽い
亜美とは言え、大人の女だ。その重さは、
人一人を絞殺するだけの重量を持っていた。

「ああ……可愛い！可愛いぜ亜美！ほら！お前の死ぬトコ全世界に見せな！」

カメラが回り続ける前で、男は暴れ回る亜美の断末魔の姿を見て、ペニスをしごきまくる。やがて、射精する男。大量の精液が、亜美の身体に掛かる。その頃には、もう亜美の身体は、ぴくりとも動かなかった。亜美はもう、完全に絶命していた。

『く……首がっ！
締まって息が！
……ぎ、ぎもち
いい……っ！』

『いぎがっ…
できなくてっ
…ぎもちいい
——っ！』

『ごっ……
「ん」なすがだ
があ……！
ぜがいじゅう
にい……！
やめで…
やめ……
……
……』

パンッ！パンッ！

廃墟の中に、亜美の尻を打つ音が響く。宙吊りになった亜美の身体を掴み、後ろから犯す男。勃起したペニスが、亜美の膣を、ぬるぬると出入りしていた。

「ったく、いい女だぜお前は……！ どんだけボッキさせる気だよ……！」

がくん、がくん、と身体を揺らす亜美。見開かれた目は、瞬きも止まり、虚空を見つめている。絶命の瞬間。亜美は、明らかに快樂に支配された表情を浮かべていた。

「自分が死ぬのに興奮するなんて、どんだけ変態なんだよ、お前は……！」

男は興奮し、さらに激しく腰を突き込んでいく。ぱん！ぱん！と鳴り響く尻。まだ死んだばかりの亜美の肌は、瑞々しさが残されており、女としての魅力があった。男は、更に勃起する。

「ほらほら、世界中の男に見せてやりな。死んでもセックスしてるトコ……！」

カメラに向けて、亜美に正面を向かせる。宙吊りの亜美の身体は、がくんがくんと人形のように動く。衝撃に、柔らかい乳房が、ぷるん！ぷるん！と僅かに揺れ動く。その様子が、実に淫らだった。

「ほらほら、イクぜ！ 亜美！ 死体に射精するぜ！ もう死んだ亜美のおまんこにチンポブチ込んだままビュッとザーメン注ぎ込むぜ！ 妊娠しな！ 俺の子供っ！」

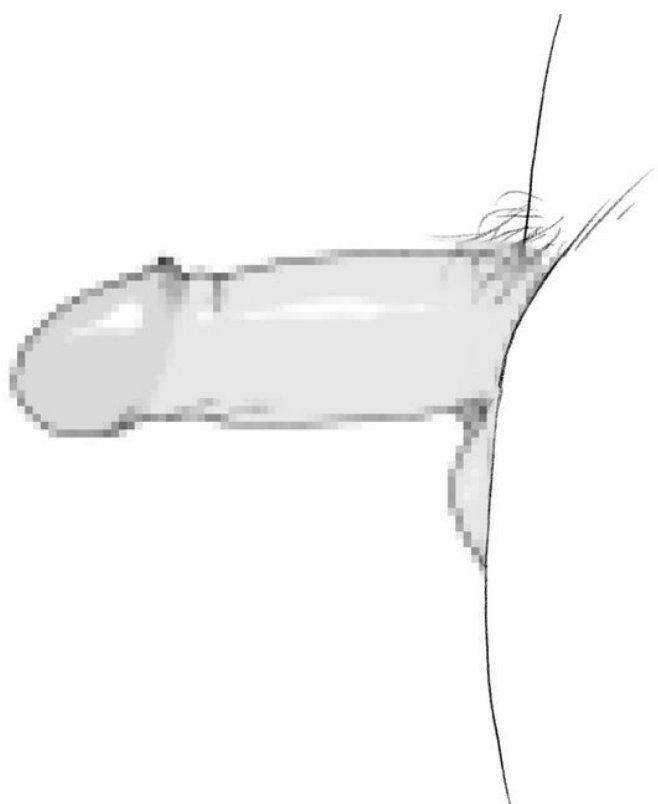
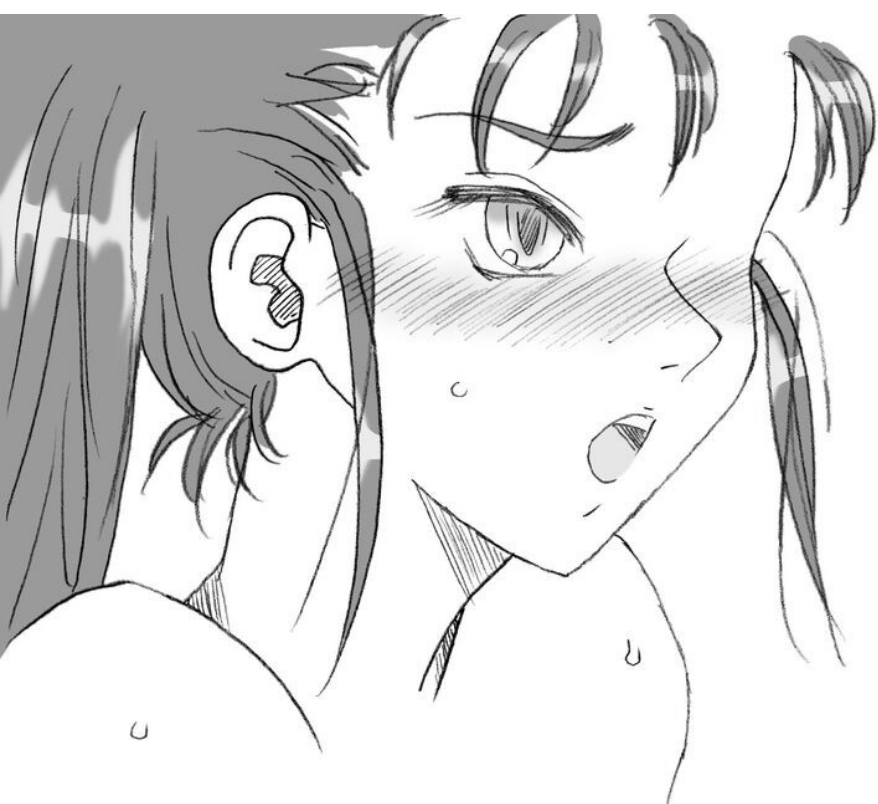
もう妊娠しない亜美の身体に、大量の精液を流し込む男。それでも、男の勃起は収まらなかった。

その後も、徹底的にレイプされる亜美。硬直し、変色し、腐敗が始まると、亜美の身体は、その辺に適当に廃棄された。

後に、亜美のレイプ、殺害、死姦動画が、ネットに出回る。亜美は、ネットの世界で、リアルレイプ殺害AV女優として、人気を博した。

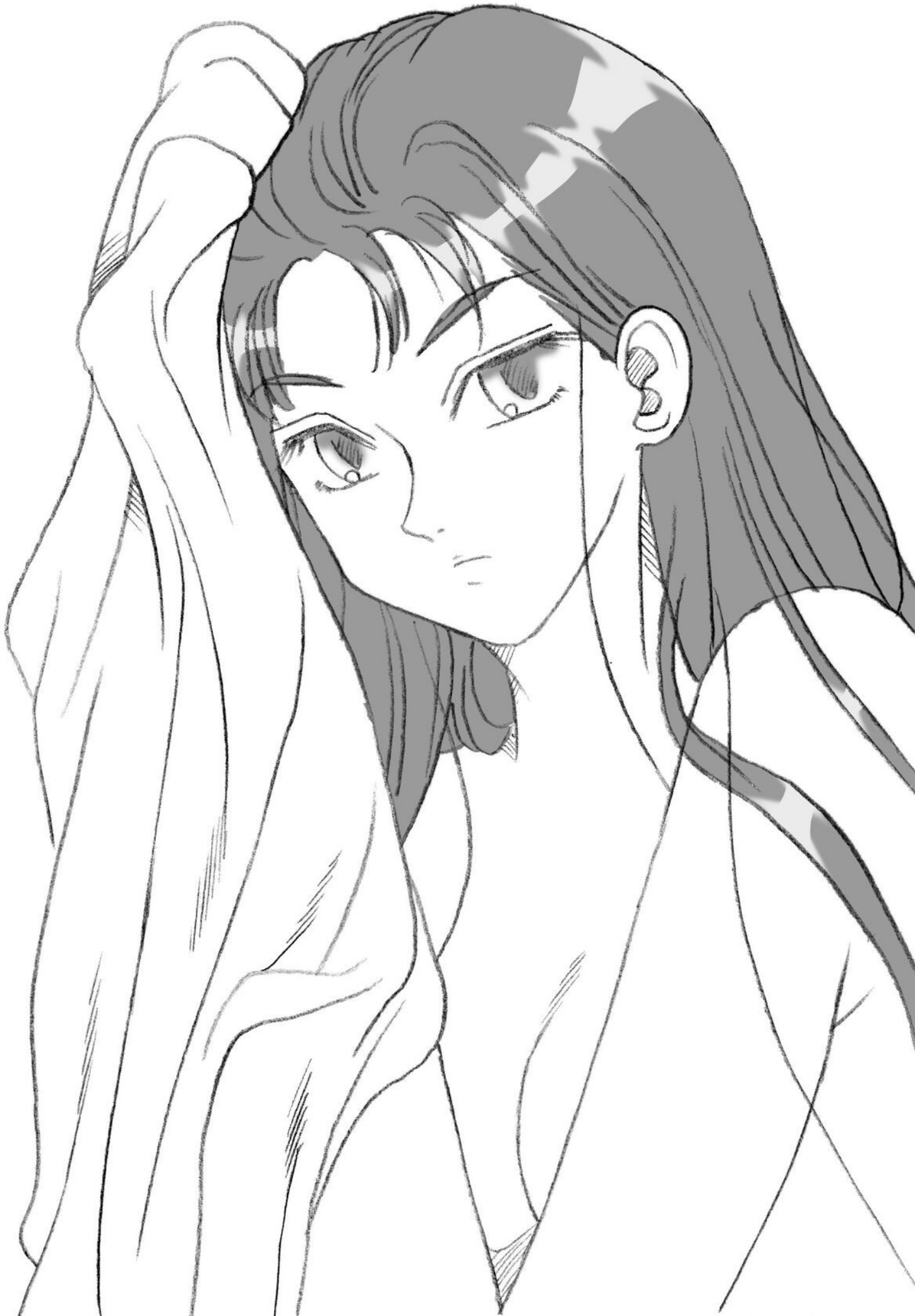
















Reminder that translations are not only welcome,
they are in demand!

提醒一下，不仅欢迎翻译，
他们很抢手！

翻訳を歓迎するだけでなく、
彼らは需要があります！

번역도 환영합니다
그들은 수요가 있습니다!